

カレンダー

令和八年

1月元旦～3日	……	新年祈祷法要	
2月12日	……	松岩寺開山喜庵西堂和尚每歳忌（開山和尚滅後四二八年）	
15日	……	涅槃会	
3月20日	……	春彼岸法要（法要後はピアノとトランペットで）	
4月8日	……	釈尊降誕絵（花まつり）	
6月下旬	……	本山妙心寺新亡供養	
8月1日～3日	……	施餓鬼受付	
13日……盆迎え	15日……施餓鬼法要	16日……盆送り	
9月 秋彼岸	……	秋彼岸法要	
12月8日	……	成道会	

○定例行事・催し物の紹介○

【坐禅会】 毎週日曜日 朝6時～7時

【写 経】 第4土曜

午後1時30分～4時30分まで（8月は盆行事のため休会）

教養講座

○もったいないをかたちに【開催中】
【金つぎ教室】 講師 花輪滋實

第4土曜日 午後1時半～午後4時半

○筋トレにはならないけれど脳トレになる【開催中】
【おとなのリトミック】 講師 大澤佳奈子

土曜日 午後1時半～午後4時半（開催日は問い合わせください）

霊園管理費納付のお願いは、春彼岸のご案内と一緒にお届けします



境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和7年正月に掲載することばを紹介します。

伝道掲示板 blog版から

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺は松岩寺ホームページのblogに載せています。

1月のことばは、平安時代末期の『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』からの引用です。佐佐木信綱校訂『新訂・梁塵秘抄』（岩波文庫）のカバーには次のように書かれています。

〈「仏は常にいませども、うつつならぬぞ……」。仏への帰依を哀切にうたったのを始め、戯歌、男女の機微、子を思う親の心を歌うなど多様な今様歌謡の珠玉集。集成者後白河法皇（1127～92）は陰謀術策に明暮れながら、白拍子らを相手に歌っているとまなかったという。現存する歌謡・口伝はごく一部だが、ここから読み取れるものは実に大きい〉

短いながらも、簡潔に説明してくれて、ありがたい表紙です。ところで、白拍子（しらびょうし）ってなに？ 〈平安末期から鎌倉時代にかけて流行した歌舞。またはそれを歌い舞う遊女（『日本国語大辞典』小学館）〉を白拍子といったらしい。

遊女なんてきくと、なまめかしくなるけれど、鎌倉時代（1192～1333）や室町時代（1336～1573）は「遊芸に従事して皇族の周辺にも出入りした芸妓を遊女」というんだって。そりゃーそうでしょう。法皇さまの近くで、「新年 はるくれば」。なんてうたうのですから江戸時代の遊女とはちがう。

今でいえば歌謡曲を演奏するわけだけど、楽器はなにかというと、尺八に鼓（つづみ）、三味線の音にあわせたい。まあ、しみりとゆっくりな音だったのだろうな。

さて、どうして門にたてるのが、椿や南天や杉の葉ではなくて、松なのか。宮司さんに聞いてみました。民俗学者でもある神崎宜武著『まつりの食文化』（角川選書）は次のように教えてくれます。

「マツは常緑で、伐った後も日もちがよい。すぐにしおれて変色するような植物は、カミの依代（よりしろ＝神霊が招き寄せられて乗り移るもの）としては不適當だったのである。また、歳神（としがみ）は、彼方のヤマから降りてくるといふ伝説が根強い。それにしたがうと、マツは、彼方の聖地（ヤマ）を代表する清浄なしるしでもあるのだ」

神道だけではなくて、禅にも「松樹千年の翠」とか「松に古今の色無し」というように、松の色をたたえる言葉がたくさんあります。おっとっと、忘れていました。私どもは松岩寺と申します、松は常緑で、岩も固くて丈夫な、おめでたい寺名なのでした。「おめでたい」には、立派だ、すばらしいの意味もあるけれど、「人がよすぎて他人にあざむかれやすい」といった使い方もします。尺八と鼓でペンペケやっていた時代とことなり、こわい電話もかかってくる現代。気をつけよ！

一月のことば
新年 はるくれば 門（かど）に松こそ
たてりけり 松は祝のものなれば、君が
命（いのち）ぞながからん
『梁塵秘抄』